

相撲と ナショナリズム

―「国技」をめぐる大相撲の近現代史―



2023年

11月9日(木) 14:40~16:10 ©Zoom開催 [Zoom情報は、ユニバーサル
パスポート揭示版に掲載] 学内者限定

相撲ファンもそうでない人も、年に何回かは大相撲をめぐる話題を見聞きするだろう。力士たちの土俵上の奮闘ぶりもさることながら、女性を土俵に上げない謎ルール、相撲部屋の暴力事件、曖昧な年寄株制度など、炎上案件も目につく。こういう問題が起こるたびに世論は「相撲は国技なのに」と怒ったり「国技だから仕方ない」と諦めたり、「国技」というパワーワードでとりあえず片づけようとする傾向がある。

しかし、相撲を「国技」とする法的根拠は存在しない。ただ単に明治期以降の日本社会が「国技のようなもの」と認識してきただけなのである。一方、大相撲はこの100年、「国技」を看板に掲げることで戦時期も不景気も不祥事も何とか乗り越えてきた。では「国技」という認識はいつ生まれ、大相撲にどんな影響を与えたのか。たとえば戦時期の国家ナショナリズムとどう結びついたのであろうか。本講義では「国技」を切り口に大相撲の100年を振り返ってみる。



講師 たいなか ちづる
胎中 千鶴 (目白大学外国語学部・教授)

東京都出身。専門は歴史学(台湾史・相撲史)。研究テーマは、日本統治期台湾の社会史や、大相撲の近現代史。ここ数年は、戦時期に活躍し「インテリ力士」として知られた笠置山勝一の文筆活動について史資料を整理している。主な著書に『植民地台湾を語るということ』(風響社、2007年)、『あなたとともに知る台湾』(清水書院、2019年)、『叱られ、愛され、大相撲!』(講談社、2019年)などがある。